HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリマ・ユカギール語の複合名詞をめぐって
Author(s)	遠藤, 史
Citation	北方人文研究, 5, 141-157
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49288
Type	departmental bulletin paper
File Information	10journal05-endo.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

コリマ・ユカギール語の複合名詞をめぐって*

遠藤　史
和歌山大学

１．はじめに

コリマ・ユカギール語のテキスト資料中には、「名詞-d 名詞」あるいは「名詞-n 名詞」のような構造を持つ形式が比較的多数出現する。すなわち名詞を 2 つ（あるいはそれ以上）含み、先行する名詞の末尾に接尾辞 -d あるいは -n がつくという構造を持つ形式である。それぞれについて代表的な例をあげる：

(1) a. t'uöl'e-d omnī
古代-d　人々
「昔の人々、古代人」[YT 129][1]
b. pierī-d amun
羽-d　骨
「羽の骨、翼」[YT 134]

(2) a. omnī-n n'ū
人々-n 名前
「氏族名」[YT 124]
b. qoj-n nume
神-n 家
「教会」[YT 125]
c. qoj-n šoromo
神-n 人
「キリスト教徒」　[YT 125]

ここで(1)は「名詞-d 名詞」の例であり、それに対して(2)は「名詞-n 名詞」の例である。

この論文の中心的な目的は、これらの諸形式が、より正確にはどのような構造を持っているのかを考察することである。資料を調べてみると、これらの形式は、上記(1)や(2)のように 2 つの名詞が分かち書きされていることもあるし、その一方で and'edod'i「涙」(and'e「目」、od'i「水」) (Krejnovič 1979:351)のように分かち書きせずに書かれていることもあり、表記からはこれらがどのような構造を持っているのか、はっきりとはわからない[2]。特に -d が現

* 本論文の基礎となった研究を行うにあたっては、以下の科学研究費補助金の援助を受けた：科学研究費補助金基盤研究(C)「コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造の関連究明による統語論記述の精緻化」（課題番号 22520434）および同基盤研究(B)「北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究」（課題番号 21401022）。

[1] [YT]は Maslova (2001) から引用した資料である。たとえば[YT 129]は、同書の 129 ページから資料を引用したことを示す。ハイフンは形態素の境界を示す。なお形態素の解釈について、本論文での議論に直接関係しない部分をまとめて示したところがある。

[2] 本論文におけるコリマ・ユカギール語の例は、既存のテキスト資料等から引用した場合は、引用元の資料が採用している表記法に従った。筆者が現地調査で得た資料については、複合が起こっていると考える位置にプラス記号(+)を表記した（2.2.2 節以降）。

れる場合、コリマ・ユカギール語では一般に語の末尾に有声閉鎖音が立つことはないので、(1)のような分かち書き表記がどれほど正確なのか疑問も残る。この点を明らかにしていくためには、いくつかの適当な基準を設定した上で、これらの諸形式の持つ性質をより詳しく検討していく必要がある。

この論文では、コリマ・ユカギール語の民話テキストである Maslova(2001)を中心的な資料として取り上げつつ、それに筆者が現地調査で採集し得た資料を加えて、この問題の考察を進めたい。結論を先に述べておくと、「名詞-d 名詞」と「名詞-n 名詞」の構造を持つ諸形式が示す特徴を観察するならば、これらの中に複合名詞と見なせるものが含まれていることは確実であると筆者は考える。ただし、同様の構造を持つすべての例が複合名詞であるという一般化は行きすぎであり、中には複合名詞というよりはむしろ、名詞句の性質を帯びているものもあると言わざるをえない。言い換えれば、これらの形式の統合度は必ずしも一様ではない。このいささか複雑な状況をより適切に記述するためには、複数の名詞によって作られる類似の構造との対照に基づいた、より広い視点からの体系的な考察が必要であると考える。

ここで「複数の名詞によって作られる類似の構造」と呼んでいるものについて、例をあげて示しておきたい。コリマ・ユカギール語には、「名詞-d 名詞」と「名詞-n 名詞」の構造に類似しながらも、微妙に細部が異なる構造が少なくとも 2 種類あることが知られている。その一方は、要素 -d あるいは -n を伴わずに、名詞が直接に名詞を修飾する構造である：

(3) a. tude　　pulut　šoromo-pul
　　3 単所有 夫　　人-複数
　　「彼女の夫の親戚」[YT 135]
　b. āt'e t'uge
　　鹿　足跡
　　「鹿の足跡」[YT 135]

この構造の例を最も多く示すのは、代名詞（名詞の下位類の 1 つ）が名詞を修飾する場合である：

(4) a. met　jō
　　1 単　頭
　　「私の頭」[YT 132]
　b. tet　numö
　　2 単　家
　　「おまえの家」[YT 133]

これらの例において、先行する名詞は何の要素も伴ってはいない。しかしそれぞれの意味から考えると、先行する名詞(たとえば(4a)の pulut「夫」)が後続する名詞(たとえば šoromopul)を修飾していると見なすのが適当であろう。これに対してもう一方の構造は、名詞が何も要素を伴わずに名詞を修飾し、かつ後続する名詞に所有接尾辞がつくものである：

(5) a. taŋ　paj　es'ie-gi
　　あの　女　父-3 所

「あの女の父」
b. taŋ　paj touke-gi
あの 女 犬-3 所
「あの女の犬」[YT 135]

この構造では、先行する名詞に何らの要素も現れていない。一方、それぞれの意味から考えると、先行する名詞(paj)が後続する名詞（たとえば(5a)の es'ie）を修飾していると解釈できるであろう。後続する名詞に所有接尾辞 -gi がついていることに注意されたい[3]。

すなわちコリマ・ユカギール語には、上で問題にした 2 種の構造の他に、さらに 2 種の類似した構造があることになる。これらをまとめて示せば、次のようになろう[4]：

(6) a. 名詞-d 名詞 [例は(1)]
b. 名詞-n 名詞 [例は(2)]
c. 名詞 名詞 [例は(3)と(4)]
d. 名詞 名詞-gi [例は(5)]

表面上の簡明さにもかかわらず、ここにはかなりの多様性が現れているとは言えないだろうか[5]。と同時に、これらの構造は互いにどのような点で異なっているのかという疑問もまた問われて然るべきであろう。

この論文では以下、これまでに提起された問題に答えることを目的として、以下のように論を進めていく。第 2 節では、複合名詞の一般的な特徴を概観したのち、若干の先行研究を検討した上で、上記の(6a)と(6b)の 2 種の構造の中には複合名詞が含まれている可能性があることを論じる。続く第 3 節では、(6a)から(6b)までの間に見られる機能の違いに着目しつつ、コリマ・ユカギール語のテキスト資料の検討を行う。最後の第 4 節では、より広い視点から、コリマ・ユカギール語においてこれらの多様な構造が生じうる理由を、この言語の類型論的特徴との関連性を指摘することによって考察したい。

２．コリマ・ユカギール語の複合名詞

２．１　複合名詞の一般的特徴

複合語の存在が指摘されている多くの言語に対して、次のような一般化が広く受け入れられている。すなわち、「複合語を構成する要素間には、何らかの統語的関係が認められることが多い。しかも、その関係は、当該言語の統語的（文法的）関係に平行しているのが一般的である」（亀井・河野・千野編 1996:1134）。これを複合名詞の場合に適用するならば、複合名詞と特に密接な関連を有し、平行した統語的関係を持つ可能性のある構造として名詞句をあげることができよう。とすれば、言語の記述という観点から直ちに提起されるのは、複合

[3] コリマ・ユカギール語において、名詞に接尾する所有接尾辞は 3 人称だけである。これは所有者が 3 人称（単数・複数を問わない）であることを示す。1 人称・2 人称の所有者は代名詞を用いて、例文(4)のように分析的に示される。なお 3 人称の所有者についても、再帰所有（主語と同一指示）の場合は分析的に、tude（3 人称単数）あるいは titte（3 人称複数）によって示される。具体例については例文(19)を参照。

[4] もちろん以下の例に見られるように、実際には名詞が 3 つ以上含まれる場合もありうる。ここでは記述の簡略化のために、名詞が 2 つの場合で代表させた。

[5] この多様性にはすでに Jochelson(1905)も気づいており、Met eči'e-d-āče「私の父のトナカイ」のような例を、Met eči'e-nu'ma「私の父の家」（numa「家」）と対照して示している。ヨヘリソンは、eči'e-d-āče のごとく d（あるいは n）が現れるのは「音便」(euphony)のためだと考えている(Jochelson 1905:376)。

名詞と名詞句はどのような特徴によって区別されるべきであろうか、という問いである。

語(word)と句(phrase)の区別を様々な事例をあげながら検討している章の中で、Haspelmath(2002:154-161)は複合名詞と（名詞）句との間の相違を、いくつかの言語的特徴を指摘することによって論じている。名詞句との区別に特に留意しながら、彼があげている複合名詞の一般的特徴の主要なものを概観しておく。

第 1 に意味論的な基準がある。ここでは複合語の全体の意味は部分の意味の足し合わせからは推測できない、という伝統的な基準（意味の特殊化）はある程度広く受け入れられているように思われるが、これについては、意味に基づく議論につきまとう不十分さが批判されている(Bloomfield 1933:227-228)。そこで Haspelmath(2002)が提案するのが、複合名詞では（意味的に）従属的な要素の側の名詞が指示的ではなく、総称的であるという意味的な基準である。たとえば英語の複合名詞 piano-tuner「ピアノ調律師」において、従属的な要素 piano は特定のピアノを指示しうるのではなく（あるいは指示のあるなしを問題にせず）、総称的にピアノ一般を意味する(156)。こちらの基準は、テキスト資料に直接当たり、文脈に照らして確かめられるという意味において、明確で有用な基準だと考えられる。

第 2 に音韻論的な基準がある。ここではアクセントの配置に見られる違いが有効でありうる。たとえば英語で、先行する名詞により顕著な強勢が置かれるもの(góldfish, báckdròp)は複合名詞であり、後続する名詞により顕著な強勢が置かれるもの(gòld médal, bàckbénch)は名詞句である(157)。このような差異の可能性は、複合語の認定に関して伝統的に受け入れられてきた基準とも合致する(Bloomfield 1933:228)。

第 3 に形態論的な基準がある。ここでは形態論的な操作がどの範囲に適用されるかが有効な基準として提案される。Haspelmath(2002:158)によれば、ポナペ語で完了アスペクトを示す接尾辞 -(a)la は語の末尾につくという。したがって kang-ala wini-o 「あの薬を飲んでしまった」（kang「食べる」、wini「薬」、-o「あの」）は 2 語（動詞とその目的語）からなる。一方、keng-winih-la「薬を飲んでしまった」（keng「食べる」、winih「薬」）は 1 語であり、winih が抱合されて形成された複合語であると判断できる(158)。

第 4 に、統語論的な基準の適用も考えられる。そのような統語的な基準の 1 つとして同書は、句を構成する要素は切り離すことができるのに対し、複合語内の要素は切り離すことができない、という特徴を提案している(158)。たとえば何らかの要素（特に修飾要素）を句あるいは複合語に加えたとき、その要素は句を構成する要素の間に割って入ることはできるけれども、複合語を構成する要素の間に割って入ることはできない。これも複合語認定に関して受け入れられてきた伝統的な基準の 1 つであるが、言語によっては若干の例外が存在する(Bloomfield 1933:232-233)。

さらにもう 1 つの統語論的基準として、複合語内の従属的な要素に更に修飾要素を加えることができないことがあげられる(Haspelmath 2002:158-159)。たとえば英語の複合名詞 kingmaker の中の従属要素(king)に更に修飾要素を加えて、*illegitimate kingmaker（「違法な王を擁立する者」の意味で）と言うことはできないし、crispbread に更に修飾要素を加えて *very crispbread（「とてもカリカリのライ麦ビスケット」の意味で）と言うこともできない。複合語内の要素はこのような統語的操作の適用先としては不適切なのである。しかしこの一般化に対しては、彼自身も指摘しているとおり、当の英語にも反例—たとえば history teacher に対して African history teacher のような—が認められる(159)[6]。　同書が

[6]統語論的基準として Haspelmath(2002:160-161)はさらに、複合語内の要素（特にその中の従属的な要素）が、前置や話題化といった移動を伴う統語的操作の適用を受けられなかったり、等位接続の結果として行われうる省略の適用を受けられなかったりすることを指摘している。しかしこれらは、そもそも当該の移動規

認めるとおり、複合語と句の区別は原理的には可能であっても、すべての基準が全言語、全複合語に適用可能だということはない(160)。この意味ではおそらく、「複合語と単語連続との違いが指摘されはするものの、両者の境界は、実際には曖昧であり、連続的である」（亀井・河野・千野編 1996:1133）という見方はおそらく正しい。特定言語の記述では、ある程度典型的な例から議論を出発させ、その上で個別例の検討を重ねつつ記述の精緻化を目指すほかはあるまい。

２．２　コリマ・ユカギール語の複合名詞

２．２．１　先行研究

コリマ・ユカギール語の文法記述において、前節で検討したような基準を厳格に適用して当該の構造に迫ろうとした先行研究はまだ存在しない。したがってこの言語の先行研究における複合名詞の認定基準は必ずしも明確ではないが、現在までの記述を検討することによってこの言語の複合名詞に関する現在までの記述の動向は把握できると思われる。

Krejnovič (1979)は簡潔な文法概説であるが、その一部で複合名詞に言及しているので、この言語における複合名詞の存在を認めていることは明らかである。複合名詞の構造としては「修飾要素」と「被修飾要素」の組み合わせからなることを指摘している(351)。このことは、この言語における複合名詞がいわゆる内心的な組立を持っていることに言及していると解釈してよかろう。彼のあげている複合名詞は本論文が扱っている範囲より若干広いようであり、上ですでにあげた and'edod'i「涙」（and'e「目」、od'i「水」）のような例のほかにも、t'eman'i「コクチマス」（t'omoj「大きい（3 人称単数）、an'il「魚」）や n'as'ejuonuje「鏡」（n'as'e「顔」、juo「見る」）などの例があげられている(351)。「コクチマス」の例は、名詞そのものではなく語根の要素が複合語形成に使われているもので、実例は少ないものの注目すべきである。「鏡」の例は、要素 -d あるいは -n によらない複合名詞の存在を例示しており、こちらも興味深い。複合名詞の網羅的な記述を目指す場合には、これらのような例も当然ながら考慮に入れる必要があろう。

Nikolaeva and Xelimskij (1997)もコンパクトな文法概説であるが、やはり複合名詞の存在に言及しており、その形成法として、(1)語幹の直接並置および(2)属格(-d/-n)構造の融合の 2 つの手法をあげている。複合名詞の例としては、aŋd'əemid'ə「動物の目の下の黒い毛」（aŋd'ə「目」、emid'ə「黒い、暗い」）が前者について、jaqadat'ə「馬」（jaqa「ヤクート」、at'ə「トナカイ」）が後者についてあげられている(166)。上で述べたようにこれらのうち本論文が直接扱っているのは後者のみであるが、前者の形成法の可能性も将来は検討する必要があるだろう。

Maslova (2003)はコリマ・ユカギール語の包括的な文法記述であるが、複合名詞について記述した項は長くない。ここでは複合名詞として要素 -d/-n を含む形式だけを認めており、これらを名詞句から区別する基準として、(1) 複合語の全体の意味が部分の意味の足し合わせからは推測できない、というもののほかに、(2)-d と -n の交替が規則的に起こること（-d は母音の前、-n は子音の前）、および(3)複合名詞の第 1 の要素のみが被所有となるような交替が許されない、という 3 つが述べられている(135)。

以上の先行研究を概観すると、次の 2 つが指摘できると思われる。第 1 に、コリマ・ユカギール語には複合名詞と見なすべき構造がある可能性が高いということである。これについては 3 つの先行研究が見解の一致を見せているが、どの範囲のものを複合名詞と見なすかに

則・省略規則が存在しない言語に対しては適用できない。

ついては、研究者によって見解が分かれている。第 2 に、コリマ・ユカギール語の複合名詞の認定基準については、まだ確固としたものが指摘されていないということである。文法概説という制約があるにせよ、Krejnovič (1979)と Nikolaeva and Xelismskj (1997)の複合名詞の議論は明確な基準に基づいていない。Maslova (2003)は 3 つの基準を提出してはいるが、(1)は意味的な基準で、これだけでは不十分であろう。また(2)については、彼女自身が要素 -d/-n を伴った名詞による名詞句の形成を認めているので、実際にはこの基準で名詞句との区別をつけることは難しい。さらに(3)は適用可能性が非常に狭いと思われる。

以上に 3 つの先行研究を概観した。この言語に複合名詞が存在するということについては、いずれの見解も共通していると言ってよい。しかし複合名詞の範囲や認定方法に関しては、必ずしも明確に述べられていない点が多い。次の節からはこれらをできるだけ明らかにして検討を進めていく。

２．２．２　複合名詞の構造

コリマ・ユカギール語において、上記(6a)および(6b)の典型的な例を取り上げ、前節での基準を参考にしながら構造を検討することにしよう。なお筆者はすでに、コリマ・ユカギール語の当該構造について概略を記述している（遠藤 2005）。以下の議論は基本的に、その議論に修正と補足を加えたものである[7]。

コリマ・ユカギール語における上記(6a)および(6b)のような構造は、典型的な例を見る限り、複合名詞であると分析するのが妥当と思われる。このような複合名詞は、次のように 2 つ（あるいはそれ以上）の名詞の結合によって形成される[8]：

(7) a. niŋie-d+amun
　　胸-d　+骨
　　「胸骨」
　b. ulege-n+mibe
　　草-n　+根
　　「（草の）根」

ここでは先行する名詞が後続する名詞の意味を修飾し、限定していることがわかる。たとえば(7a)では、「胸骨」はあくまでも「骨」の一種であって、その位置が「胸」にあるにすぎない。ここでは先行する名詞が Haspelmath(2002)のいう「従属的な要素」にあたる。この従属的な要素には -d あるいは -n がつくが、その機能については以下で論じる。

まず意味論的な基準から検討しよう。するとこれらは、各構成要素の意味を足し合わせたものとは異なる意味を持ちうることがわかる：

(8) a. jaχa-d+a:če
　　ヤクート-d+トナカイ

---

[7] この節以降、資料記号を付していない例文は、筆者が現地調査で得た例である。このような例の表記は遠藤(2005)で用いた表記に従った。現地調査はロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）コリマ上流地区のネレムノエ村にて行った。調査にあたってご協力をいただいた現地ネレムノエ村の人々、特にコリマ・ユカギール語の言語調査にご協力いただいたユカギール人の方々に心からのお礼を申し上げたい。

[8] この場合、厳密に言うならば「名詞」ではなく、「名詞語幹」と記述するほうが適当であろう。以下の(8a)の最初の要素 jaχa(<jaχal)「ヤクート」のように、名詞そのものではなく、その語幹だけが語形成に関与している場合があるからである。

「馬」
b. kuʒuː-d+onor-eː
空-d+舌-指小形
「虹」

たとえば(8a)において「ヤクート」と「トナカイ」の意味を単純に足し合わせても、必ずしも「馬」の意味にはならない。(8b)でもまた、ここでも「空」と「小さな舌」の単なる意味的な足し合わせから「虹」の意味を得ることは難しい。同様の基準は Maslova (2003:135)も提示しているが、すでに 2.1 節で検討したとおり、これだけでは十分に説得的ではない。

意味論的な基準としては、これらの構造がさらに 2.1 節で取り上げた Haspelmath(2002)の提案を満たしていることに注目するべきではないだろうか。たとえば(7a)の場合、この構造に含まれる従属的な要素 niŋie「胸」は、特定の誰かの人間の胸を指示しているのではなく、「胸」一般を指示している。すなわちこの要素は総称的であり、前節で検討した意味論的基準を満たしている。同じことは(8a)の jaχa「ヤクート」(一般) についても、また(8b)の kuʒuː「空」(一般) についても言える。

このような総称的意味はどのようにして生じるのだろうか。Maslova (2003:66)は以下のように、要素 -d および -n の有無による意味の相違を記述している：

(9) mēmē čuge ‘trace of a/the bear’　mēmē-n qār ‘bear skin’
āče čuge ‘trace of a/the deer’　āče-n ömgede ‘deer saddle’
šaqale nume ‘house of a/the fox’　šaqale-n ferma ‘fox farm’
(Maslova 2003:66)

ここで各対の左側は当該要素を欠いた構造であり、先行する名詞の意味は指示的である[9]。一方、右側は要素 -n を持つ構造で、先行する名詞の意味は総称的である[10]。彼女の記述の中でこれらの例が複合名詞であるとは明言されていないものの、要素 -d および -n がついた場合の名詞に総称的意味が伴うことは、上の一連の例から確かであろう。これらの事実から見て、総称的意味は要素 -d および -n の接尾によってもたらされることは明らかであろうと思われる。

ところで Maslova (2003)はこの -d および -n を「修飾形」(attributive form)と記述している。これはたとえば Nikolaeva and Xelimskij (1997)がこれらを「属格」(genitive)と呼ぶのを引き継いだものとも言え、それなりの伝統を持った用語ではある。しかしすぐ上で見たように、この形式の機能は単に 2 つの名詞を修飾・被修飾の関係で結びつけるだけではない。つまり、接尾した当該名詞の意味を総称的にするというまた別の機能がこれらの形式にはあり、これは「属格」的な機能の範囲を逸脱している。これらの要素をどのような用語で呼ぶのが適当かという問題はまた別の機会に譲らなくてはならないが、これらが修飾と総称化という、互いに独立した 2 つの機能をあわせ持つ要素であることはここで確認しておきたい。

次に音韻論的な基準を検討しよう。Krejnovič (1979:353-354)がすでに指摘しているよう

[9] ここで「指示的」(referential)というのは、必ずしもその名詞が定(definite)であることを意味せず、定あるいは不定が問題にされるという意味である。ただし、筆者の観察によれば、この構造ではほとんどの場合、先行する名詞は定である。
[10] なお、この引用箇所で Maslova は 要素 -d を含む例をあげていないが、本文の説明から判断する限り、その機能を要素 -n と平行的に考えていることは明らかである。

に、この要素 -d と -n の使い分けは、後続する名詞が母音で始まるか、それとも子音で始まるかによる。母音で始まる場合には -d、子音で始まる場合には -n が選ばれる：

(10) a. aŋǰe-d +oːǰiː
　　目-d　+水
　　「涙」
　b. aŋǰe-n +pugulʼbie
　　目-n　+体毛
　　「眉毛」

ここで、特に -d が使用された場合、コリマ・ユカギール語の音素配列の原則に照らせば、語の境界がその直後にないことは明らかである。すでに述べたように、コリマ・ユカギール語では一般的に、語の末尾に有声閉鎖音が立つことはないからだ[11]。これは Maslova (2003:32)の指摘にあるように、この言語の音節が有声閉鎖音で終わることがないということから必然的に明らかでもある。したがって例(10a)は、コリマ・ユカギール語に特有の基準ではあるが、複合名詞の音韻的基準の 1 つを確実に満たしているということができよう。しかしながらその一方で、音素/n/は語末にも現れることができるので（nugen「腕」、amun「骨」など）、 -n が使われている場合については、この基準はそのまま適用することはできない。

そこでもう 1 つの音韻的な基準としてアクセントの配置を検討しよう。筆者の観察によれば、これらの構造において、最も強いアクセントは 1 つの音節に限られる：

(11)a. jaχa-d+aːče：　jaˈχà.dáː.če
　　ヤクート-d+トナカイ
　　「馬」(=(8a))
　b. joduǰube-n +χaːr：　joˈdu.ǰù.benˈχáːr
　　リス-n　　+毛皮
　　「リスの毛皮」
　c. lebie-n+pude-be：leˈbìen.puˈdé.be
　　地-n　+上-～の場所
　　「土、大地」

ここで語の右にそれぞれアクセントの位置を示した。ピリオドはこれらの例に限って音節の境界を意味する。ここから明らかなように、これらの構造では最も強いアクセントが後続する名詞内の 1 箇所にあり、2 次的に強いアクセントが先行する名詞内（従属的な要素）の 1 箇所にある。コリマ・ユカギール語ではアクセントは境界表示的な機能が強く、基本的には各語について最も強い箇所が 1 つある。上記の構造のアクセントは基本的にはこの型に従っているので、音韻論的な基準から見て、これらが全体として 1 語（すなわち複合名詞）であ

[11] たとえば代名詞 tabun「あれ」に対して、tabudek「あれ（焦点形）」(tabud<tabun「あれ」、-ek 焦点)という形態音韻的交替を起こした形式がある。また d で終わる動詞語幹 jad「送る」のような場合、2 人称単数命令形（子音語幹では-φ）でもこのままの形では実現されず、形態音韻的交替を起こして jan「送れ」となる。ただし語中、母音間では形態音韻的交替は起こさず jadum「(彼は）送った」(jad「送る」、-u-挿入母音、-m 他動詞・3 人称単数）となる。以上の例は、コリマ・ユカギール語において語末に d が生じる状況が組織的に避けられることを示している。

る可能性は高いと言える[12]。

形態論的な基準としては、名詞につく複数接尾辞（屈折接尾辞の 1 つ）が現れうる位置に注目したい。この接尾辞は、現在論じている(6a, b)の構造では、後続する名詞につく：

(12) a. ludu-n qonže-pul
　　鉄-n　破片-複数
　　「鉄屑」[YT 142]
　b. titte　　ludu-n loskut-pe
　　3 複所有　鉄-n　かけら-複数
　「彼らの鉄片」[YT 142]

これらの例に見るように、複数接尾辞は後続した名詞だけにつく（titte については 3 節の議論を参照)。テキスト資料の中に、(6a, b)の構造を持ち、かつ先行する名詞の方に複数接尾辞がついた例は見出されない。

統語論的な基準に関しては、Haspelmath の提案した基準の大半は、残念ながらコリマ・ユカギール語では使うことができない。コリマ・ユカギール語は（英語のような）様々な統語論上の移動規則を持っていないからである。一方、テキスト資料に見られる例から判断する限り、いま問題にしている構造の内部に何らかの修飾要素が割って入ることは困難だと考えられる：

(13) a. irkin　ejl'ō-d'e　　odu-n　　numö-ge
　　1 つの　広い-形動詞 ユカギール-n　家-位置格
　　「ある広いユカギールの家で」[YT 127]
　b. tiŋ　odu-n　　pugil'
　　この ユカギール-n 主人
　　「このユカギールの主人」[YT 134]
　c. irkin　odu-n　　marqil'-gele
　　1 つの　ユカギール-n　娘-対格
　　「あるユカギール娘を」[YT133]

Haspelmath が述べた、従属的な要素だけに修飾要素を加えられない、という基準をここで確かめてみよう。たとえば(13a)では、「広い」のは「家」であり、「広いユカギール」という解釈は難しい。したがって、この構造の従属的要素である odun には修飾要素は直接かかっていないと思われる[13]。(13b)でも、指示代名詞の修飾形 tiŋ「この」が修飾するのは「ユカギール」ではなく、獲物を首尾よく捕まえた「ユカギールの主人」(odun pugil')であることが文脈により確かめられる。同様に(13c)では、「1 人」なのは「ユカギール」ではなく「ユカギール娘」であるから、やはり同様の状況が認められる。以上から、当該構造の前に何らかの修飾要素が立ったとき、その修飾要素はこの構造の中の「従属的な要素」―たとえば(13a)

[12] 一方(6c)の構造においては、筆者の観察では、それぞれの名詞に対等な強さのアクセントが置かれる点に(6a, b)との違いが見られる。たとえば met jo:「私の頭」（met 1 人称単数、jo:「頭」）のアクセントは mét jó: である。

[13] (13a)と(13c)の最初の単語 irkin「1 つの」には要素 -n が含まれており、かつ後続する名詞は母音で始まる。この問題についてはすぐ次の節で論じる。

の odun―だけを修飾することができないことが示される。

以上、要素 -d あるいは -n を伴った構造(6a, b)について、その詳しい構造を様々な基準によって検討してきた。その検討の結果を見る限り、ここで問題にしている構造を典型的には複合名詞と記述することに大きな問題はないと考えられる。しかしながら、資料中に現れる個別の例を観察すると、同じような構造を持ちながら複合名詞からは逸脱し、名詞句に接近する性質を示す例も認められる。次節ではそれらを検討する。

２．２．３　複合名詞からの逸脱

コリマ・ユカギール語では、Krejnovič (1982)がすでに指摘しているように、数詞が名詞を修飾する際、要素 -d あるいは -n が数詞の名詞語幹の末尾につく：

(14) a. irki-n+pitči:
　　1 つ-n+小鳥
　　「1（羽）の小鳥」
　b. ataʁu-d+uö
　　2 つ-d　+子ども
　　「2（人）の子ども」
　c. ja-n+ʃoromo
　　3 つ-n+人
　　「3（人）の人」

これらの例に見るように、-d と-n の間の選択は後続する名詞の最初の音素に条件づけられている可能性が高い。したがってこれらの構造は、基本的には複合名詞と解釈できると思われる。ところがテキスト資料を観察すると、後続する名詞が母音で始まる場合でも -d を取る数詞が現れる例は少なく、むしろ -n を取る場合が多い：

(15) a. irki-n　aŋǰe-gi
　　1 つ-n　目-3 所
　　「(彼の) 1 つの目」(Nikolaeva 1997:22)
　b. irki-n　unuŋ-ŋe
　　1 つ-n　川-位置格
　　「1 つの川に」(Nikolaeva 1997:31)

この構造を複合名詞であると考えた場合、このような事例は複合名詞からの逸脱例だと考えざるを得ない。ではこの逸脱はどのような条件によるものだろうか。

これらの例が現れるテキスト資料の文脈を検討してみることにしよう。(17a)の例は次のような文脈で表れる（下線部）：

(16) <…> tiŋ　　almə-gə　　<u>irki-n aŋǰə-gi</u>　　pojnə-j,　　<u>irki-n　aŋǰə</u>
　　この　シャーマン-位置格　1 つ-n　目-3 所　白い-自 3 単　1 つ-n　目
　šoromə-d aŋǰə titime:-j.
　人-d　　目　～の状態だ-自 3 単
　「(…)このシャーマンは一方の目が白く、他方の目は人の目のようだった」

(Nikolaeva 1997:22)

ここではシャーマンの一方の目と他方の目とが対比的に描写される。意味の上で相対的に重要な点はむしろ数詞の側にある。このことが当該構造からの数詞の独立を動機づけ、その結果 irkin という形が可能になっていると言えよう。それに対して、終わりに近い箇所に現れる šoroməd aŋǰe の部分は、「人間の目」という（人間にとっては）普通の存在について述べている以上、意味的な重要さは相対的に小さい。また次の例では、irkin が物語への導入のような意味合いで使われている（下線部）：

(17) šoromə-pul čöl'ə-d　omni꞉-gə　<u>irki-n　unuŋ-ŋə</u>　modo-l'əl-ŋi
人-複数　古代-d　人々-位置格　1つ-n　川-位置格　住む-不確実法-自 3 複
odu-pə.
ユカギール-複数
「昔々、人々はある川のほとりに住んでいたそうだ、ユカギール達は」
(Nikolaeva 1997:31)

この文は物語の最初の文であるから、川の具体的な姿はまだ定かではない。しかしこの後の物語は、飢えた村人たちが、キリスト（と思われる男）の指示に従って川で漁をする、という話であるから、ここで導入された川が物語の上で重要な役割を果たすことは明らかである。このような意味的要因を考えると、この場合も同様に数詞が当該構造から相対的に独立する動機があり、その結果として複合名詞からの逸脱が起こると言えよう。

このように考えると、上の(15a)の例についても一貫した説明が与えられるように思われる。物語の上では、この家に集まって人々が様々な議論をするというのがこの後の展開であり、irkin はやはり導入的な機能を持っていると言えよう。その結果、irkin は構造上独立し、結果として修飾語の ejl'ōd'e「広い」が複合名詞 odun numö「ユカギールの家」との間に挿入されることが可能になっていると考えられる。

以上の考察は、Nikolaeva and Xelimskij (1997)が文法概説の中であげている次のような対の例とも相関する：

(18) a. jaqadat'ə-lək ejrə-l
馬-焦点　歩く-動名詞
「馬が行く」
b. jaqa-d　anid'ə-k　kel-u-l
ヤクート-d　候-焦点　来る-挿入母音-動名詞
「ヤクート人の候が来る」　(Nikolaeva and Xelimskij 1997:116)

Maslova (2003:91-92)の指摘によれば、この言語の焦点表示システムに使われる名詞の焦点マーカーには -(e)k と -lek の 2 種類があるが、-(e)k が使われるのは、名詞にかかる修飾語だけに焦点が当てられる場合（たとえば対照などの文脈）である。この記述に基づくと、焦点マーカーとしてこの -(e)k が現れている場合には、それがつく名詞は複合名詞ではなく、少なくとも 2 語からなる「修飾語プラス名詞」構造であると考えられることになる。上記の例はこれを示すものであると言えよう。この場合、(18b)の jaqad「ヤクート人の」は相対的に独立し、その結果この構造は複合名詞から逸脱し、名詞句に接近していると考えられる。

以上いくつかの例をあげ、意味的な要因によって複合名詞が本来の構造から逸脱し、名詞句に接近する例を検討した。この考察から明らかになるのは、この言語における複合名詞と名詞句の境界は完璧なものではなく、主として意味的な要因がはたらいた場合には、構造が複合名詞から逸脱し、結果として名詞句に接近する場合もあるということである。このことは複合名詞と(6c)の構造を持つ名詞句の連続性を示唆するものと言えよう。そこで次節では視野を広げ、(6)で取り上げた 4 種の構造全体を概観し、複合名詞をその中に位置づけていくことにする。

３．コリマ・ユカギール語の名詞句と複合名詞

ここで議論の便宜のために、(6)であげた諸構造をここにもう一度あげておく：

(6) a. 名詞-d　名詞　（前節で検討）
b. 名詞-n　名詞　（前節で検討）
c. 名詞　　名詞
d. 名詞　　名詞-gi

前節で検討した(6a, b)と対照した場合、(6c)と(6b)はどのような構造、そして、その構造と結びつく可能性のある機能を持つのだろうか。

まず(6c)の構造から検討しよう。Maslova(2003:66)があげている(9)のペアに関する意味的な記述を受け入れるならば、この構造において先行する名詞は指示的であり、総称的ではない。つまり(6a, b)と対照したとき、先行する名詞は意味論的に見て独立性がより高いと考えられる。このことを端的に示すのが、(6c)の構造で最も頻度が高い例、すなわち先行する名詞が人称代名詞（名詞の下位類の 1 つ）の場合である。1 人称・2 人称代名詞の例は(4)であげたので、以下に 3 人称代名詞の例を追加する：

(19) a. tude　　uö-r-pe-get
3 単所有　子ども-挿入子音-複数-離格
「彼の子どもたちから」[YT 141]
b. titte　　jouje-pul
3 複所有　網-複数
「彼らの網」[YT-145]

このように先行する名詞が人称代名詞の場合には、要素 -d と-n は決して現れることがない。この事実はおそらく、人称代名詞が必ず指示を持たなければならないということと相関している。

名詞の場合は代名詞と異なり、先行する名詞が指示的かどうかは、それぞれの文脈に照らして談話上で判断しなければならないが、テキスト内の例から判断する限り、先行する名詞は概して指示的であるといえる。次の 2 例を文脈に当たって検討しよう：

(20) a. tude　　pulut šoromo-pul
3 単所有　夫　　人-複数
「彼女の夫の親戚」[YT 135]

b. āt'e t'uge
　鹿　足跡
　「鹿の足跡」[YT 135] (=(6))

これらの例が出現するまでの文脈の概略は次のようである―ユカギールの男が猟に出て同行者とはぐれ、行方が分からなくなる。そこでその妻が夫を探しに行く。その直後の文は次のとおりであり、これは(20a)を含む（下線部）：

(21) tā　　qon-t'ī-delle　　tude　　pulut šoromo-pul+laŋin　kewe-j-l'el
　そこで 行く-少し-副動詞 3単所有 夫　人-複数+側　　行く-完了-不確実法/自 3単
　「そこで（妻が）少し行くと、（彼女の）夫の親戚のところに着いた」[YT 135]

この例から明らかなように、先行する名詞 pulut「夫」は、この文脈では明らかに特定の指示を持つ。一方、(19b)の āt'e「鹿」を含む例が出現するまでの文脈の概略は次のようである―夫の親戚のところに着いた妻は、鹿が死んでいるのを見たと話す。そこで村人が妻とともに夫を探しに行くと、3 筋の足跡がある。彼らはその中で、鹿の足跡を追おうと話す。その理由を示すのがその直後の文であり、これは(20b)を含む（下線部）：

(22) āt'e t'uge-ge　　jōdu-de-t　　ejrie-l'el-te-j
　鹿　足跡-位置格　向かう-多回-副動詞　歩く-不確実法-未来-自 3単
　「（彼は）この鹿の足跡を追って行ったのだろう」　[YT 135]

このように文脈にあたると、先行する名詞が総称的な意味ではなく、文脈上はっきりと特定できるような個別の指示対象を有していることが分かる。

以上の意味的事実は、構造とも関連している。例は非常に少ないものの、(6c)の構造では、先行する名詞と後続する名詞の間に要素が割って入りうる：

(23) mit　tamun touke-n mied'ī-le
　1複　あれ　犬-n　　橇-具格
　「私たちのあの犬橇を」[YT 126]

ここで、先行する mit「私たち（の）」と後続する複合名詞 touken mied'ī「犬橇」の間に独立して用いられうる指示代名詞 tamun「あれ」が入っている。指示代名詞のような独立性の高い形式の挿入可能性は、筆者の観察によれば、(6a)や(6b)の構造において見出されない。以上より、意味論的・統語論的に見る限り、(6c)の構造は「名詞プラス名詞」の内部構造を持つ名詞句であり、それに対応した機能を示すと言える。

次に(6d)の構造を検討しよう。Maslova(2003:289)はこの種の構造が、先行する名詞（修飾要素）がそれ自身の指示対象を持つとき（たいていの場合は特定的で定）にのみ現れる、と記述している。テキスト資料から確認する限り、この指摘は基本的に正しいと思われる：

(24) tiŋ　paj pulut-ki
　この　女　夫-3所
　「この女の夫」[YT 135]

ここで先行する名詞 paj「女」は、指示代名詞 tiŋを伴っていることから分かるように、それ自身の指示対象を持っており、文脈上明らかに定である。

それでは、(6c)と(6d)の間にはどのような機能的な相違があるのだろうか。主要な相違点は次の 2 点であるように思われる。第 1 に、(6d)の場合、先行する名詞は文脈上十分に確立した要素であり、それゆえ、省略が可能である。その結果、次のような例が生じうる：

(25) a. touke-gi　šobol'ā-nu-l'el
　　犬-3 所　止める-進行-不確実法/自 3 単
　　「(彼の) 犬は（吠えるのを）止めた」[YT 142]
　b. n'erpe-gi　qodō-j
　　衣服-3 所　横たわる-自 3 単
　　「(連れの) 衣服が置いてあった」[YT 143]

ここでは本来存在すると考えられる、-gi の接尾した名詞に先行する名詞が、文脈上十分に確立した要素と解釈された結果省略され、結果的に表面に現れていない。これに対して(6c)の構造の場合は、先行する名詞がたとえ文脈的に特定できるものであったとしても、それを省略してしまうことはできない。第 2 に、これはいささか逆説的なことかもしれないが、(6d)の場合、先行した名詞が文脈的に十分確立していることの一種の代償であるかのように、後続する名詞自体は文脈的にまだ十分確立していないものであってもよい。言い換えれば、後続する名詞自体は新情報である場合がある。たとえば次の例を観察しよう。これは上述の例(5b)が含まれる文である（下線部）：

(26) <u>taŋ　paj touke-gi</u> l'ie-l'el
　　あの 女 犬-3 所　いる-不確実法/自 3 単
　　「あの女には犬がいた」[YT-135]

この例文での動詞 l'ie「いる、存在する」は自動詞なので、取れる項は 1 つしかない。つまりここで taŋ paj toukegi「あの女の犬」は全体でひとつの名詞句と分析する以外の解釈はない。しかしながらこの構造では、taŋ paj が文脈的に十分確立していると解釈されるので、touke「犬」という、文脈上この時点までに現れていない新情報をこの構造において導入することが許される（この犬は女の所有物なので -gi 自体は必要である）[14]。この点で文(26)は結果として、日本語の「象は鼻が長い」のような構文に表面上接近する。

このことはおそらく次の 2 つの事実とも相関しているだろう。まず第 1 に、Maslova (2003)の観察に基づけば、例は少ないものの、(6d)の構造を用いて所有者（先行する名詞）を外置させることが可能である（下線部）：

(27) luki-gi　ulumu-j　<u>momušā</u>
　　矢-3 所　尽きる-自 3 単 モムシャー
　　「モムシャーは矢が尽きた」(Maslova 2003:345)

[14] コリマ・ユカギール語の焦点標示においては、名詞側に焦点マーカーがなくても、-gi がついていれば「焦点」として扱うことができる。このことは、以上に述べた事実と関連しているかもしれない。

第 2 に、(6d)の構造における所有者は、この言語における指示転換(switch reference)のコントローラーとなることができる（下線部）：

(28) mit　emd'e tamun juö-t　　ibil'e-gi　　šobol'e-j
　　[1 複 弟　　これ　見る-副動詞]　泣き声-3 所　止む-自 3 単
　　「私たちの弟がこれを見ると、（その）泣き声が止んだ」(Maslova 2003:518)

すなわち所有者は、同一主語を要求する副動詞-t の後続節で、本来の主語と同じ扱いを受ける。これらは(6d)での所有者が文脈上十分に確立した結果として生じているように思われる。

この節では、(6c)と(6d)の構造と機能を、(6a, b)との対照という観点から論じた。ここまでの議論をまとめておこう。―構造的な観点から見るならば、(6a, b)の構造は基本的には、要素 -d あるいは-n を伴った複合名詞である。それに対して、(6c)および(6d)は名詞句を構成し、(6c)と(6d)の違いは先行する名詞の省略可能性に求められる。一方機能的な点から見るならば、(6a, b)から(6d)に向かうにつれて、構造内で先行する名詞は指示的に独立性が高まり、(6d)では随意的に省略可能なまでに達する。その一種の代償作用として、(6d)では後続する名詞の側に新情報を担う要素が現れることが可能になる。

４．結びに代えて

本論文では(6)にまとめたような、コリマ・ユカギール語におけるいくつかの類似した構造に注目し、互いの構造および機能の違いを検討することによって、それぞれの特徴をより精密にとらえることを試みた。残された問題は、この言語になぜこれほど多くの、しかも互いに類似した構造が存在しているのだろうかということである。

コリマ・ユカギール語の最初の全体的な記述である Jochelson(1905)から最近の文法である Maslova(2003)までに共通していることは、いずれもこの言語の文法構造に情報構造が深く関係していることを指摘し、記述しているということである。現代の言語類型論における代表的研究者である Comrie もまた、同系のツンドラ・ユカギール語を中心になされたユカギール語文法の概観において、情報構造（特に焦点 focus）という類型論的特徴に注目している(Comrie 1981)。実際のところ、情報構造に一切触れることなしにこの言語の文法記述を行うことは困難であり、筆者もまた、情報構造にある程度留意しつつこの言語の概観的な文法記述を行っている（遠藤 2005）。

すでに先行研究の多くが示す通り、コリマ・ユカギール語において、情報構造が顕著に表示されるのは主節である。すなわちこの言語の主節においては、主語および目的語のどの位置に焦点が置かれるか（あるいは焦点に関して中立的か）が、名詞と定動詞（主語に応じた人称屈折を担う動詞）の両方に、精緻に表示される。名詞（自動詞主語および他動詞目的語）の側には焦点マーカーが生じ得る。一方、定動詞の側には、(1)自動詞・主語焦点、(2)自動詞・焦点中立、(3)他動詞・目的語焦点、(4)他動詞・焦点中立、という 4 種の屈折パラダイムが生じ得る。

一方でまた、情報構造が反映されるのは、主節における上記のケースだけなのだろうか、という疑問も当然生じてくる。ここで、名詞句にもまた情報構造を反映した構造の相違・機能の相違が存在しうると想定してみることは、おそらく無益ではあるまい。そのように想定した場合、可能性のひとつとして生じてくるのが、名詞句を構成する複数の名詞のうち、それぞれの名詞の持つ指示性を反映した構造上の相違、およびそれに相当する機能の相違であろう。すでに上で見た通り、要素 -d および -n を伴う構造の多くは複合名詞と記述できると

思われるが、その場合でもなお、修飾語が意味的に重要な場合はそこからの逸脱が認められる。また、(6c)や(6d)の構造においては、それぞれ先行する名詞の文脈上の指示が、これらの構造を成立させる重要な要因となっていることがうかがわれる。とすれば、以上に考察してきた一連の現象はとりもなおさず、複合名詞と名詞句への情報構造の反映であるとは言えないであろうか。この言語において複合名詞と名詞句との間の境界が完璧でない理由はおそらく、意味や情報構造の本来的な連続性であろう。それらの複雑な要因が言語形式との境界面において現出する現象の一端が、この論文で考察してきたものであると言えよう。

参考文献

Bloomfield, Leonard
1933 *Language,* Holt, Rinehart and Winston.
Comrie, Bernard
1981 *The languages of the Soviet Union,* Cambridge University Press.
遠藤史
2005『コリマ・ユカギール語の輪郭―フィールドから見る構造と類型―』三恵社.
Haspelmath, Martin
2002 *Understanding morphology,* Arnold.
Jochelson, Waldemar
1905 Essay on the grammar of the Yukaghir language, *American Anthropologist* new series 7(2): 369-424.
亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）
1996『言語学大辞典　第 6 巻　術語編』三省堂.
Krejnovič, E. A.
1968 Jukagirskij jazyk. *Jazyki narodov SSSR,* Volume 5: 435-452. Nauka.
1979 Jukagirskij jazyk, *Jazyki azii i afriki.* Volume 3: 348-369. Nauka.
1982 *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku,* Nauka.
Maslova, Elena (ed.)
2001 *Yukaghir texts,* Tunguso Sibirica 7. Harrassowitz Verlag.
2003 *A grammar of Kolyma Yukaghir,* Mouton Grammar Library 27. Mouton de Gruyter.
Nikolaeva, I.A. and Xelimskij, E.A.
1997 Jukagirskij jazyk, J*azyki mira: Paleoaziatskie jazyki*, Indrik.
Nikolaeva, Irina
1997 *Yukagir texts,* Specimina Sibirica XIII, Savariae.

略語一覧

1 単＝1 人称単数、2 単＝2 人称単数、3 単＝3 人称単数、1 複＝1 人称複数、2 複＝2 人称複数、3 複＝3 人称複数、3 所＝3 人称所有、自＝自動詞（屈折）、進行＝進行アスペクト、多回＝多回アスペクト

On Compound Nouns in Kolyma Yukaghir

Fubito ENDO
Wakayama University

This paper examines the following four types of constructions in Kolyma Yukaghir: (1)[Noun-*d* Noun] and (2) [Noun-*n* Noun] where *-d* and *-n* are suffixes attached to the first noun; (3) [Noun Noun]; and (4) [Noun Noun-*gi*] where the third person possessive suffix *-gi* is attached to the second noun. The author argues that the first two types of these constructions, (1) and (2), are better described as compound nouns on the basis of their semantic, morphological and syntactic properties. The author further aims to show that in some cases, deviance from the basic types of these constructions are recognized. The analysis of some relevant cases reveals that semantic factors, such as contrast and emphasis, can cause these deviances. On the other hand, the two other constructions, (3) and (4), are analyzed as noun phrases. The degree of referential property differentiates one type form the other. In order to support this conclusion, the author provides a detailed observation of some non-elicited passages taken from Kolyma Yukaghir folktales. The author finally speculates that the variation across these four different, but similar, constructions reflects the unique typological characteristic that the Yukaghir languages exhibit, that is, an elaborate system of information structure marking.